地域の環境が小学生にあたえる影響
―北海道道東地区の生活時間調査より―

小　野　恭　子・鎌　田　浩　子
（北海道教育大学釧路校）

Elementary school children of the regional environment that affect on -Time use survry in the east region of Hokkaido-

Kyoko ONO, Hiroko KAMATA

【概要】
北海道道東地区では、へき地校の統廃合が進む、商業施設のある場所に偏りがあるなどの特徴がある。この特徴が子どもたちの生活に与える影響について、へき地校とへき地校でない学校の小学校５年生を対象とした生活時間調査から明らかにした。へき地校では第１に収入労働に費やす時間があり、平日よりも休日の方が長い。第２に学習のための移動時間が短い。第３に女子の平日における戸外活動の時間が短い。第４に女子の休日の家事時間が長いという４つの特徴が見られた。このことから地域の影響だけでなく、家の仕事に影響を受けており、ジェンダーバイヤスが残っている可能性も明らかになった。しかし統廃合による通学時間への影響はスクールバスを使用するため無いことが明らかになった。

１，はじめに

生活時間調査は，どのような生活行動を行い，それに対してどのくらいの時間を費やしているかが明らかにすることができる調査である。さらに日常では意識していない家庭内での役割や性別役割分業について，数値で明らかにすることができる。

全国的な生活時間調査には，社会生活基本調査やベネッセ教育研究所の行っているものがある。社会生活基本調査では，10歳以上を対象にしている。この調査では都道府県別・年齢別・曜日別に集計されているために，都道府県別の特徴を捕らえることはできる。しかしある特定地域の特徴を捕らえることは難しい。ベネッセ教育研究所が行っている生活時間調査では，地域を抽出しているがその地域とは都市部が多く，へき地の特徴を捕らえることはできない。

また小学生を対象として地域に注目した生活時間調査では浅沼らの調査がある。この調査では盛岡市の小学生を対象に実施し，平日と土曜・日曜日の生活の変化を調べている。また小野らは北海道内の札幌と釧路の小学生の生活時間を比較し，平日の学習時間と余暇活動時間に大きな差があることを明らかにしている。さらに小野は東京都内の小学生を対象にした生活時間調査を行い，家族特に母親の就業の有無によって，子どもが家事を手伝う時間が異なることを明らかにしている。これらの調査から，子どもの生活は平日と休日，住んでいる地域家族の就労形態等によって変化することが明らかになってきている。

北海道における小学校数は平成20年度1300校であったが平成24年には1169校まで減っている現状がある。これまでも自宅から学校までの距離が長いためへき地校では通学が不便であったが，学校の統廃合が進むことにより自宅から学校までの距離がさらに遠くなり不便さは増している。さらに地域の特徴として道東地域は市街地に大型商業施設が集中しているため、商業施設が少ない居住地では，居住地近辺での買い物が不便であり、休日に家族で市街地の商業施設に買い物に出かけることが多くなっている。このような地域の状況が小学生の日常の生活活動にどのような特徴をもたらしているかを、へき地校[注1]とへき地でない学校[注2]（以下普通校と称す）の児童の比較を通して明らかにし，児童の生活実態をふまえた家庭科の学習内容の設定や、学習生活指導上の配慮などの一助にすることを目的とした。

２，調査方法及び調査対象

調査対象は，北海道道東地区４市町村（釧路市･釧路町・厚岸町・浜中町）にある公立小学校の５年生であり，調査実施時期は2012年６月から11月である。

回収した調査用紙のうち，記録の不備をのぞいた有効回答数はへき地校８校で男子23名，女子27名，普通校６校で男子86名女子127名となった。回答者数及び回収できた学校数は表１に示した。

表１　有効回答者数

学　校　種	学校数	男　子	女　子	合　計
へ き 地 校	8校	23人	27人	50人
普　通　校	6校	86人	127人	213人
合　　計	14校	109人	154人	263人

生活時間調査は10分ごとに区切りのある記入用紙に記入してもらう日記形式で行った。平日・休日（学校のない土曜日・日曜日）における24時間の全ての行動を10分毎に記録してもらい，記録された行動を，後から調査者が分類を行うアフターコード形式で行った。

これまでの生活時間調査では様々な分類の仕方がある。社会生活基本調査では第１次活動，第２次活動，第３次活動に分類している。ベネッセ教育研究所の調査では睡眠，生活，通学・移動，学校，部活動，放課後の時間等に分類している。また大竹らは小学生の生活時間調査において，収入労働時間，無収入労働時間，学校時間，余暇活動時間，生理的生活時間の５つに分類している。

これらの分類を参考に，本研究では小学生の子どもの生活の中心である学習時間が明らかになるように分類を構成し，収入労働時間，家事的生活時間，生理的活動時間，学習時間，余暇活動時間の５つに分類をすることにした。さらに細かい生活行動については表２に示す行動分類にしたがって分類し，集計を行った。

表２　行動分類表

大分類	小分類	主な行動
収入労働	収入労働	勤務，家での仕事，通勤
	家業の手伝い	家業の手伝い
収入労働時間合計		
家事的生活時間	家事	食・衣・住に関する家事，下の子の世話
	買い物	買い物，買い物の移動
家事的時間合計		
生理的生活時間	睡眠	睡眠・昼寝
	休息	休息，休憩
	食事	食事・間食，外食，給食
	身支度	入浴，身支度，医療
生理的時間合計		
学習時間	学校での学習	学校での授業，休み時間，クラブ，委員会，掃除
	学校外の学習	家庭での学習，学習塾などでの学習
	学習の為の移動	学校，学習塾等への移動時間
学習時間合計		
余暇活動時間	趣味娯楽	スポーツの観戦・応援，観戦に関する移動，室内のあそび，戸外のあそび，文化的習い事，習い事の練習
	戸外の活動	運動，スポーツの習い事，ピクニックなどの戸外活動，戸外活動に関する移動
	室内の活動	テレビ，ラジオ，読書，新聞・雑誌，マンガ，パソコン
	交際，組織活動	子ども会など組織活動，親せきとの交際，家族との会話，交際に関する移動
余暇活動合計		
不明		

３，結果

１）全体平均の比較

はじめに大まかなへき地校と普通校の比較をし，その特徴をつかむこととする。平日における両校の男女平均における比較を表３[注3]に示す。

大分類では収入労働時間ではへき地校３分普通校0分，家事的生活時間は両校で11分，生理的生活時間ではへき地校680分普通校691分，学習の時間ではへき地校535分普通校499分，趣味娯楽の時間ではへき地校３分普通校235分となっていた。大分類で両校に最も差があるものは学習の時間であり，へき地校が36分長くなっていた。次に差が大きかった分類は趣味娯楽の時間で普通校が32分長くなっていた。

表３　平日における各校平均　（分）

平日		へき地校	普通校
収入労働	勤務	0	0
	家業	3	0
収入労働合計		3	0
家事的時間	家事	9	9
	買い物	2	2
家事的時間合計		11	11
生理的時間	睡眠・休憩	540	535
	食事	90	100
	身支度	50	56
生理的時間合計		680	691
学習の時間	学校での学習	436	394
	学校外での学習	56	55
	学習の為の移動	44	51
学習時間合計		535	499
趣味・娯楽の時間	趣味・娯楽の時間	84	89
	戸外活動	43	58
	室内の活動	75	83
	交際・組織活動	0	4
趣味・娯楽合計		203	235
その他		0	1
不明		7	4
合計		1440	1440

次に小分類を比較し10分以上の差があった分類に注目した。へき地校のほうが普通校より長く行っていた行動は，学校での学習時間で42分長くなっていた。これに対し普通校のほうが長く行っていた行動は食事で10分，戸外の活動で15分であった。

へき地校は自宅から学校までの距離が遠いにもかかわらず，普通校よりも学習のための移動時間が短くなっている。へき地校は通学距離が長くなっているが，その移動にスクールバスを使っているからである。またスクールバ

スを使っていない場合でも，保護者が車で送り迎えをしているためであると考えられる。さらにへき地校周辺では学習塾などの自宅外での学習施設がほとんどない。そのために，学習のための移動時間は，登下校のみであるため短くなっていると考える。へき地校では学習の時間が長くなっているが，これは学校で過ごす時間が長いからである。その理由として，スクールバスの利用が関係していると推測される。スクールバスの運行は学校の活動に支障が無いよう余裕をもって組まれている。したがって，始業前，終業後に学校にいる時間が普通校より長くなると考えられる。

さらにへき地校の特徴として，現代の日本では小学生の生活時間に表れることの無い収入労働に費やす時間が，３分という短い時間ではあるが表出していることがあげられる。この収入労働３分は家業の手伝いを行っていた。

普通校では戸外の活動時間が15分長くなっている。平日であることを考慮すると帰宅後にスポーツなどの習い事をしていると考えられる。また食事時間がへき地校に比べて10分長いことから，ゆっくりと食事を取っている様子が伺える。

次に休日に於ける両校の男女平均を比較し表４に示した。

表４　休日における各校平均　　（分）

休日		へき地校	普通校
収入労働	勤務	0	0
	家業	15	0
収入労働合計		15	0
家事的時間	家事	26	23
	買い物	36	32
家事的時間合計		62	55
生理的時間	睡眠・休憩	600	595
	食事	87	104
	身支度	51	47
生理的時間合計		738	746
学習の時間	学校での学習	0	0
	学校外での学習	52	53
	学習の為の移動	0	0
学習時間合計		52	53
趣味・娯楽の時間	趣味・娯楽の時間	221	251
	戸外活動	141	124
	室内の活動	166	165
	交際・組織活動	28	26
趣味・娯楽合計		556	565
その他		0	0
不明		16	20
合計		1440	1440

大分類では収入労働時間はへき地校15分普通校0分，家事的生活時間ではへき地校62分普通校55分，生理的生活時間ではへき地校738分普通校746分，学習時間ではへき地校52分普通校53分，趣味娯楽の時間ではへき地校556分普通校565分となっている。へき地校と普通校において10分以上の差があった大分類は収入労働時間のみであり，へき地校が15分長くなっていた。

次に小分類において10分以上の差がみられた分類は，へき地校が普通校より長く行っていた分類は家業の手伝い15分，戸外の活動17分である。これに対し普通校がへき地校より長く行っていた行動は食事17分，趣味娯楽の時間30分であった。

普通校では収入労働時間は平日も休日も無いがへき地校では平日も休日も収入労働が見られ，へき地校では休日になると家業を手伝う時間が長くなっているため，休日になるとその差が大きくなっていた。

２）男女別における比較

次にへき地校と普通校において男女別に比較したときに，どのような特徴があるのかをその特徴を捕らえることにした。平日の両校の男女別平均を比較したものを表５に示した。

表５　平日の男女別平均の比較　　（分）

校種		へき地校		普通校	
性別		男子	女子	男子	女子
収入労働	勤務	0	0	0	0
	家業	5	0	0	0
収入労働合計		5	0	0	0
家事的時間	家事	3	17	7	10
	買い物	2	1	0	3
家事的時間合計		5	18	7	13
生理的時間	睡眠・休憩	533	542	538	534
	食事	88	90	97	102
	身支度	39	60	51	59
生理的時間合計		659	692	686	695
学習の時間	学校での学習	425	432	395	393
	学校外での学習	39	66	53	57
	学習の為の移動	46	43	50	51
学習時間合計		510	542	497	500
趣味・娯楽の時間	趣味・娯楽の時間	132	90	91	89
	戸外活動	64	6	77	47
	室内の活動	61	77	79	86
	交際・組織活動	0	0	0	6
趣味・娯楽合計		257	173	247	227
その他		0	0	0	1
不明		3	16	3	4
合計		1440	1440	1440	1440

まず，へき地校における男女による行動の比較を行う。平日のへき地校では，収入労働では男子５分女子0分，家事的生活時間では男子５分女子18分，生理的生活時間では男子659分女子692分，学習時間では男子510分女子542分，

趣味娯楽の時間では男子257分，女子173分となっている。10分以上差のある分類は，男子が女子より長いものは趣味娯楽の時間で84分長く，女子が男子より長いものは家事的生活時間13分，生理的生活時間33分，学習時間32分であった。

小分類において男子が女子よりも10分以上長いものは，趣味娯楽の時間42分，戸外活動58分である。女子が男子よりも10分以上長いものは家事時間で14分，身支度で21分，学校外での学習で27分であった。

したがって平日のへき地校における男女の特徴は，男子は家業の手伝いと趣味娯楽及び戸外の活動に時間をかけ，女子は家事と身支度さらに学校外での学習時間が長くなっている。しかし女子の趣味娯楽は短く特に戸外活動はほとんど行っていないことがわかった。

次に普通校における男女による行動の比較を行った。平日の普通校では収入労働時間は男女ともに０分である。家事的生活時間では男子７分女子10分，生理的生活時間では男子686分女子695分，学習時間では男子497分女子500分，趣味娯楽の時間では男子247分女子227分となっている。10分以上差がある行動で男子が女子より長いものは趣味娯楽の時間で20分長く，女子が男子より長い時間をかけているものはない。次に小分類で10分以上差がある行動で，男子が女子よりも長い時間をかけている行動は，戸外の活動で30分長く，女子が男子よりも長い時間をかけているものは無い。したがって普通校では，男子は女子よりも戸外活動が長いため趣味娯楽の時間は長くなっているが男女の性差はあまり無いことが明らかになった。

次に休日のへき地校と普通校における男女別平均を比較し，表６に示した。

へき地校における男女を比較し大分類で10分以上の差があった行動は次の通りである。男子が女子より長かった行動は収入労働時間で28分，趣味娯楽の時間で93分，女子が男子より長く行っていた行動は，家事的生活時間で28分，生理的生活時間で84分であった。小分類で10分以上の下がる行動のうち男子が女子より長く行っていた行動は家業の手伝い28分，趣味娯楽147分，戸外活動34分長くなっていた。

女子が男子より長く行っていた行動は，家事42分睡眠休憩28分食事27分身支度27分室内の活動28分交際・組織活動24分であった。これらのことから休日におけるへき地校では，男子は家業の手伝いをし，趣味娯楽や戸外活動に多くの時間をかけているのに対し，女子は家事や睡眠休憩，食事，身支度，室内の活動といった，室内での活動に多くの時間をかけていることが分かる。特に家業の手伝いと家事では男子の家業の手伝いと家事を足した時間が40分であり，女子の家事時間が40分であることから，家業の手伝いと家事が同じ手伝いと考えられているのではないかと推測できる。

次に普通校における性別による差を比較する。大分類で10分以上の差があった行動は次の通りである。男子が女子より長い時間をかけていた行動は学習時間10分，趣味・娯楽の時間84分であり，女子が男子より長く行っていた行動は生理的生活時間46分であった。

表６　休日の男女別平均の比較　（分）

校種		へき地校		普通校	
性別		男子	女子	男子	女子
収入労働	勤務	0	0	0	0
	家業	28	0	0	0
収入労働合計		28	0	0	0
家事的時間	家事	12	42	16	27
	買い物	30	28	25	36
家事的時間合計		42	70	41	63
生理的時間	睡眠・休憩	573	601	579	605
	食事	68	95	100	107
	身支度	33	60	39	52
生理的時間合計		673	757	718	764
学習の時間	学校での学習	0	0	0	0
	学校外での学習	43	52	59	49
	学習の為の移動	0	0	0	0
学習時間合計		43	52	59	49
趣味・娯楽の時間	趣味・娯楽の時間	347	205	281	232
	戸外活動	161	127	149	108
	室内の活動	133	161	155	172
	交際・組織活動	9	33	32	21
趣味・娯楽合計		651	521	617	533
その他		0	0	0	0
不明		4	40	5	30
合計		1440	1440	1440	1440

次に小分類において比較をする。男子が女子より長かった行動は，学校外での学習10分，趣味娯楽の時間49分，戸外の活動41分，交際・組織活動11分であった。女子が男子より長く行っていた行動は，買い物11分，睡眠･休憩26分，身支度13分，室内の行動17分であった。これらのことから普通校の男子は学校外での学習・趣味娯楽・戸外活動・交際組織活動を長く行う傾向があるが，これに対して女子は睡眠・休憩や身支度時に時間をかけ，室内での活動を多く行う傾向があることがわかった。

３）事例検討１

酪農業の家業の手伝いが現れていた事例

へき地校で特徴的であった家業の手伝いを行っているのはへき地校男子23人中５名であった。そのうち牛舎の手伝いが4名，昆布漁の手伝いが１名であった。したがってそれぞれの家業別にどのような実態があるかについて事例検討を行うことにした。酪農を手伝っている事例は平日１名休日３名であったが，平日休日両日手伝っている事例はなかった。そこで，休日に最も長く手伝っている事例を表７に示した。

家業の手伝いは平日0分，休日90分となっている。生理的生活時間は平日650分，休日780分，学習時間は平日540

表７　酪農の手伝いがある事例　（分）

曜日		平日	休日
収入労働	勤務	0	0
	家業	0	90
収入労働合計		0	90
家事的時間	家事	0	0
	買い物	0	0
家事的時間合計		0	0
生理的時間	睡眠・休憩	550	660
	食事	70	90
	身支度	30	30
生理的時間合計		650	780
学習の時間	学校での学習	440	0
	学校外での学習	0	0
	学習の為の移動	100	0
学習時間合計		540	0
趣味・娯楽の時間	趣味・娯楽の時間	70	350
	戸外活動	0	0
	室内の活動	180	220
	交際・組織活動	0	0
趣味・娯楽合計		250	570
その他		0	0
１日合計		1440	1440

表８　漁業の手伝いがある事例　（分）

曜日		平日	休日
収入労働	勤務	0	0
	家業	60	410
収入労働合計		60	410
家事的時間	家事	0	0
	買い物	0	0
家事的時間合計		0	0
生理的時間	睡眠・休憩	620	570
	食事	110	80
	身支度	45	70
生理的時間合計		775	720
学習の時間	学校での学習	420	0
	学校外での学習	50	30
	学習の為の移動	70	0
学習時間合計		540	30
趣味・娯楽の時間	趣味・娯楽の時間	55	230
	戸外活動	0	0
	室内の活動	10	50
	交際・組織活動	0	0
趣味・娯楽合計		65	280
その他		0	0
１日合計		1440	1440

分，休日0分，趣味娯楽の時間は平日250分，休日570分となっていた。平日は家業の手伝いを行っている時間はなかった。これに対して休日は90分間家業の手伝いを行っていた。平日は学習のための移動時間が100分となっており，へき地校の平均よりもかなり長い。

よってスクールバスを使っていないことも考えられる。平日も休日も学校以外での学習時間，戸外の活動，交際・組織活動がない。したがって学校から帰宅すると，スポーツなどを行うことは少なく，室内で活動することが多くなるといえる。平日は学校での授業があるために学習時間が540分あるが休日は0分となっているため，家業の手伝いを行う時間が生まれると考えられる。

４）事例検討２

漁業の家業の手伝いが現れていた事例

漁業の手伝いをしていた子どもの事例からその特徴をとらえることにする。漁業の手伝いをしていた子どもは一人であった。その事例を表８に示した。

家業の手伝いは平日60分休日410分である。生理的生活時間は平日775分休日720分，学習時間は平日540分休日30分，趣味娯楽の時間は平日65分休日280分となっていた。

平日も休日も家業の手伝いを行っており，さらに休日は平日の約７倍の時間を家業の手伝いに費やしていることが分かる。

一般的には平日よりも休日のほうが睡眠・休憩時間は長くなることが多いが，この事例では睡眠時間が休日のほうが平日より50分短くなっていた。よって休日は睡眠時間を削り家業の手伝いを行っていることがわかる。また平日における趣味娯楽の時間が65分と短く，平日も休日も戸外の活動が０分である。家業の手伝い内容が昆布干し，昆布を干すための砂ならしと記述されており，この手伝いによって体を動かしているためにスポーツなどの戸外活動を行っていないと推測される。

調査を行った時期は，昆布漁の最盛期であり調査を行った地域が昆布漁の盛んな地域である。したがって，小学生であっても大切な労働力として活動していることが分かる。

家業の手伝いを行っている場合にも家業によって手伝い方が異なることが分かる。酪農業では家業の手伝いは休日のみであるが，漁業の場合は平日も休日も家業の手伝いをしている。この理由として酪農業は毎日行うべき牛の世話がある程度決まっており，作業の予想が立てられるのに対して，漁業の場合時期によって収穫できるものが異なり，特に昆布の場合には収穫できる時期が短いことから子どもの手伝いが必要とされているからと考えられる。

５）へき地校の特徴

へき地校の特徴として４点挙げることができる。１点目は収入労働に費やす時間があることである。２点目は学習のための移動時間が自宅から学校までの距離の長いへき地校のほうが普通校より短いことである。３点目はへき地校の女子が平日戸外活動を行う時間が短いことである。４点

目としてへき地校の女子の休日の家事時間が長いことである。

特徴１つ目として，へき地校において現代の日本の小学生では見られない収入労働時間があることが挙げられる。その時間は平日５分休日28分となっており，平日よりも休日のほうがより家業の手伝いに取り組んでいることが分った。さらに収入労働に時間を費やしているのは男子のみであることが分かった。

家業の手伝いを行っていた男子児童は23人中，平日は１人，休日は４人である。男子が家業の手伝いに費やした時間は，平日は２人とも60分，休日は70分から410分と開きがあった。これは平日には学校生活が生活の大部分を占めるため手伝う時間は短いが，休日は学校生活が無いため家業を手伝う人数も時間も増えているといえる。またこの傾向は家業が酪農である場合よりも漁業である場合に強く見られた。

特徴の２つ目として平日における女子の戸外活動が短いことが挙げられる。平日に女子が戸外活動に費やしている時間は６分である。へき地校の男子が64分普通校の男子77分女子が47分と比較しても，極端に少ない。この理由として男子はへき地校周辺でもスポーツ少年団などが組織され，平日・休日問わず日常的に野球やサッカーなどのスポーツを行っている。普通校の女子も学校を活動場所としたバレーボールなどのスポーツに取り組んでいる。しかしへき地校の女子にはそのようなスポーツを行う機会が少ないと考えられる。 さらに戸外活動を行っている時間帯は，放課後にスクールバスまでもしくは保護者が迎えに来るまでであった。このことから，自宅に帰ると運動を行う機会はさらにないことが推測される。

特徴の３つ目として学習への移動時間が普通校より短いがその差は小さいことがあげられる。へき地校では，自宅から学校までの距離は長いが，通学は多くの場合スクールバスを使っている。さらにスクールバスを使わない場合は親が車で送り迎えをしているため，通学距離が長くても時間がかからないと考えられる。また，へき地校の周辺には学習塾はほとんど存在せず，通学以外の学習のための移動時間はほとんどない。このため，学習のための移動時間が短くなっているといえる。

特徴の４つ目として休日における女子の家事手伝い時間が長いことが挙げられる。 へき地校の女子が休日に家事に費やしていた時間は42分である。男子より女子ほうが家事時間が長い傾向があるが，休日のへき地校の男子12分，普通校男子16分，女子27分と比べても，へき地校の女子が費やす時間が長いことがわかる。

また平日のへき地校と普通校の女子を比較してみると，へき地校17分，普通校10分となっておりへき地校の女子のほうが７分多い。したがって，平日からへき地校の女子は家事に取り組むことが多いが，休日にはさらに多くの時間を費やしているといえる。

４．考察

１）へき地校の児童に対する家庭科教育の配慮について

へき地校においては男女を比較したときに２つの特徴が見られた。一つ目は酪農業や漁業などの家業の手伝いを男子のみが行っていることであり，二つ目は女子が平日も休日も家事手伝いを普通校の女子よりも多く行っていることである。

これらのことから男子は家業の手伝いを行い，女子は家事を手伝うことで家庭内の仕事を分担しているという，性的役割分業の様子が伺える。よって男子は家業の手伝いを女子は家事を手伝うというジェンダーバイヤス的な考え方が家庭生活内に存在していることも考えられるため，家庭科の学習で家庭生活の役割などを扱うときには配慮する必要がある。例えば，開隆堂の小学校家庭科の教科書では『家族の一員として自分にできる家庭の仕事を分担し･･･』と記述されているように家庭内での家事分担は男女協力して分担することを気付かせることが大切である。

へき地校では，通学にスクールバスもしくは保護者による車での送迎を利用している。よって，保護者に送迎してもらっていることから自分の生活が家族によって支えられていることに気付かせることができる。

教科書では，家族団らんの時間を作って家族とコミュニケーションをとることを一例として挙げられているが，家業を手伝いながら，家事を手伝いながら，また登下校の車内でなど，子どもの生活にあった方法を考えさせることが必要である。

２）へき地校における学校教育上の配慮について

へき地校における学校教育上の配慮は３点挙げられる。一点目はへき地校では家業によって，子どもの生活スタイルが大きく異なっていたことに対する配慮である。例えば，漁業を家業としている場合には，朝の起床は早く，就寝時間も早く，家庭での学習時間はなかった。したがって，家庭環境を十分に理解し学校での学習指導と連携させる必要性があると考えられる。さらに家庭での学習習慣に対しての配慮が必要である。

２点目はへき地校周辺には，学習塾などの学習施設がほとんど無いことに対する配慮である。学校外での学習は平日休日ともに50分程度行われているがこの数値には学校の準備も含めているため，実際に学習している時間は少ないと推測される。さらに自宅での宿題が大部分を占めていた。したがって学習習慣を身につけるために，学校教育では家庭教育を含め家庭と連携を取る必要があると考える。

３点目はへき地校では，児童生徒の家同士が離れていることに対する配慮である。平日における女子の戸外活動が極端に短いことから，帰宅後の女子はスポーツなどを行う機会が少ないことが明らかになった。また登下校もスクールバスを使っていることも含めて考えると，学校教育において，体を動かす場と時間の確保が必要であると考える。

3）今後の課題

今回の調査は，道東地区の４市町を対象に行ったものである。これらの調査では，家業についての調査項目は行っていないために，調査対象者による記述から家業を判断している。したがって，酪農業・漁業を家業にしている場合にジェンダーバイヤスが現れやすいのかどうかについては，今後道東地区の他の町についても調査が必要である。

漁業・農業などは季節によって，作業内容が変わる。したがって，忙しい時期や閑散期によって子どもの生活も変わることが考えられる。よって，今後は異なった季節での調査も行うことが望ましいと考える。

注

1，ここでいうへき地校とは，へき地教育振興法により，へき地学校と認定されている学校のことである。
2，へき地校ではない学校（本文では普通校と称す）とは，へき地教育振興法によりへき地学校と認定されていない学校のことである。
3，表の数値は，分類項目ごとに四捨五入したものである。そのために，合計が1440とずれる場合がある。

引用及び参考文献

・平成23年度社会生活基本調査報告書
・Benesse教育研究開発センター：第２回子ども生活実態基本調査報告書，2010
・浅沼道成，矢崎弥，小笠原義文：子供の生活時間に関する事例研究，Artes liberales，第60号，217-239，1997
・大竹美登利：大都市雇用労働者夫妻の生活時間に見る男女平等，近代文芸社　1997
・大竹美登利，小野恭子，中山節子：Analyses the elementary school children's time use as a resource of human capital in the future，東京学芸大学紀要，第59集，411-416，2008
・小野恭子：家族の生活時間データーから見る子どもの生活について，東京学芸大学附属学校研究紀要，第35集，65-74，2008
・小野恭子，鎌田浩子，大竹美登利：小学校の生活時間調査から見る都市間比較，日本科学教育学会研究会研究報告，Vol.27　No2，83-86，2012
・小野恭子，大竹美登利，鎌田浩子：地域が子どもの生活に及ぼす影響-北海道道東地区における生活時間調査から-，日本家政学会第65回大会研究発表要旨集，pp99，2013
・平成24年度学校基本調査報告：北海道：http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tuk/013sbs/12.htm，2013年３月３日閲覧
・小学校家庭科教科書「わたしたちの家庭科」：開隆堂出版，pp26

（小野恭子　釧路校講師）
（鎌田浩子　釧路校教授）